

かくれんぼっこ

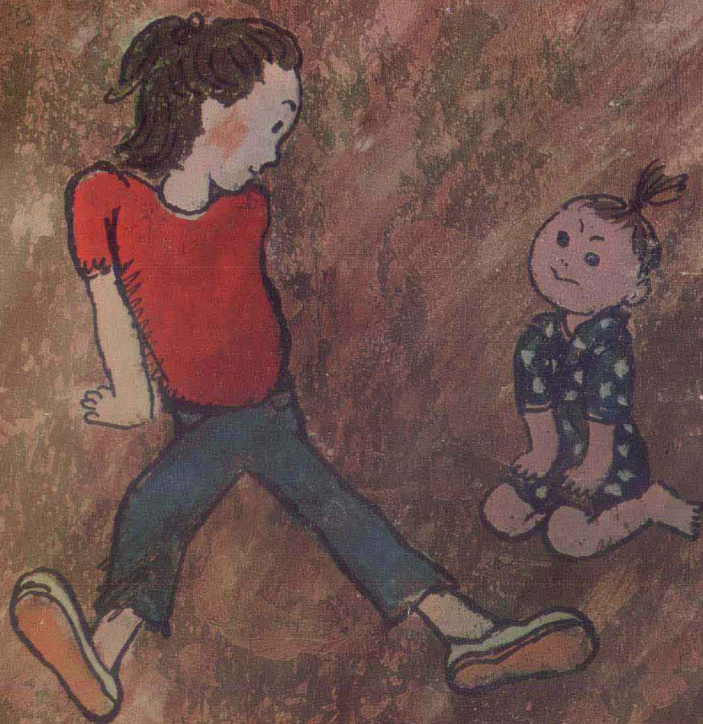
山下夕美子 作 太田大八 絵



かね新作児童文学選・2

かくれんぼっこ

山下夕美子 作 太田大八 絵



E04191

かくれんぼっこ

あかね新作児童文学選 2



* 著 者

やました ゆ み こ
山下夕美子

* 発行者

岡 本 陸 人

* 印 刷

新興印刷製本株式会社

錦明印刷株式会社（オフセット）

* 製 本

有限会社文麗社

* 発行所

株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田 3-2-1 〒101

電話 東京 263-0 6 4 1（代）

1973年12月 5 日第 2 刷

NDC 913

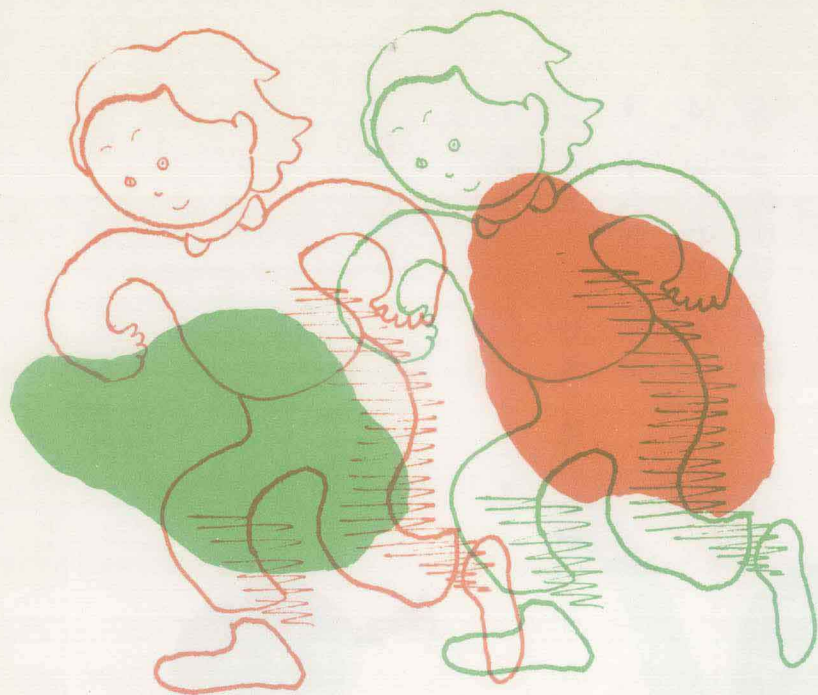
8393-14802-0027

山下夕美子

かくれんぼっこ

あかね書房 1973

161p 22cm（あかね新作児童文学選 2）



はじめに

もしも……よ。

とつぜんきみのそばに、

きみぐらいの友だちがあらわれたら。

そしてその友だちのすがたは、

きみにしかみえないとしたら……。

どうする？

だれかに話してみる？ それとも、

じぶんだけのひみつにしちゃう？

もくじ

- 1 あきら あがつく…… 6
- 2 イタチとウサギと思いちがい…… 19
- 3 オムなしライス…… 34
- 4 いじわるクイズ…… 46
- 5 このゆびとまれ…… 63





6 いるの、いないの、どっちがいい?..... 83

7 くしゃみはわすれたころにやってくる..... 99

8 ペンフレンド..... 118

9 ぼっこ おぼえがき..... 134

あとがき..... 160

■ 著者紹介 山下夕美子



一九四〇年東京に生まれる。
伊藤道郎芸術学院舞踊科卒業。
広島の同人誌『子どもの家』
に所属し、新鮮な作品を発表
している。第二回児童文学者
協会短編賞、「二年2組はヒ
ヨコのクラス」で第十八回小
学館文学賞を受賞。主な著書
に「ごめんねほっこ」「青空
にばんざい」「ましかく通信」
「ぶらんこゆれて」等がある。

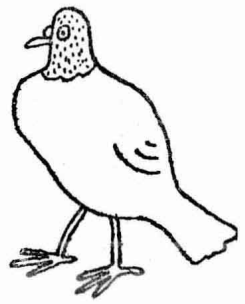
■ 画家紹介 太田大八



一九一八年生まれ。長崎県に
育つ。多摩美術学校卒業。日
本イラストレーター会議、児
童出版美術家連盟に所属し、
広く活躍。日本童話会賞、小
学館絵画賞、国際アンデルセ
ン賞絵画部二位を受賞。「馬
ぬすびと」「あかつびよろ」
「へっこきあねさがよめにき
て」等、絵本、挿画に充実し
た作品が数多くある。

山下美子 作
かくれんぼっこ





1 あきらあがつく

やわらかな日ざしの下で、ぽつんとひとり、石の門にもたれている子。
名まえは、あきらです。

としては九さいと二か月、むろん小学生。

学年は、三年——といっても、三学期がつきをすませて、ただいま四年生ま待ち。

そして、あきらは転校てんこう予定生よていせいです。

おとうさんの転勤てんきんで、九州きゅうしゅうのこの町にきたとき、学校は春休みにはいったところでした。だから転校予定生が、ただの転校生になるのは、まだ十日あまりもさきってわけ。

それで、あきらはまだ、新しい学校を知りません。友だちが親切しんせつかいじわるか、いえ、友だちができるかどうか、わかっていないのです。

はっきりわかっているのは、これ。

（あだなは、オデコってつけられる！）

それから、たぶん、これも。

（どうせみんな、いうんだろな。あきらは男ん子のごたる——って。）

男ん子のごたる、というのは、「男の子のようだ」という意味です。

けき、おむかいのおじさん*にい*われて、あきらが最初におぼえた方言でした。
でも、あきらはいままさら、おどろきもしません。

——かっぱつなおじょうちゃん。

——女の子にしては、ちょっとねえ。

——男の子みたい。

なんてことばを、生まれてからきょうまで、きかない日があつたでしょうか。

（ぜーんぶ、はずれ。あたしちゃん*と*、女の子らしい女の子ですよ、だ。）
と、すこしだけ、ふんがいますけど。

もつとも？

——あの子がね、あなたのことを、こんなかげ口きいてたわよ。
と、親切しんせつにおしえてあげる子。

じぶんが正しくても、強い子や大ぜいの考えとちがえば、つつしみぶかく下をむいてる子。

（そういうのを、女の子らしいっていうんなら——）

あきららは、まあるく広い……けどじぶんでは、まんざらでもないと思ってるひたいに、
てのひらをあてます。

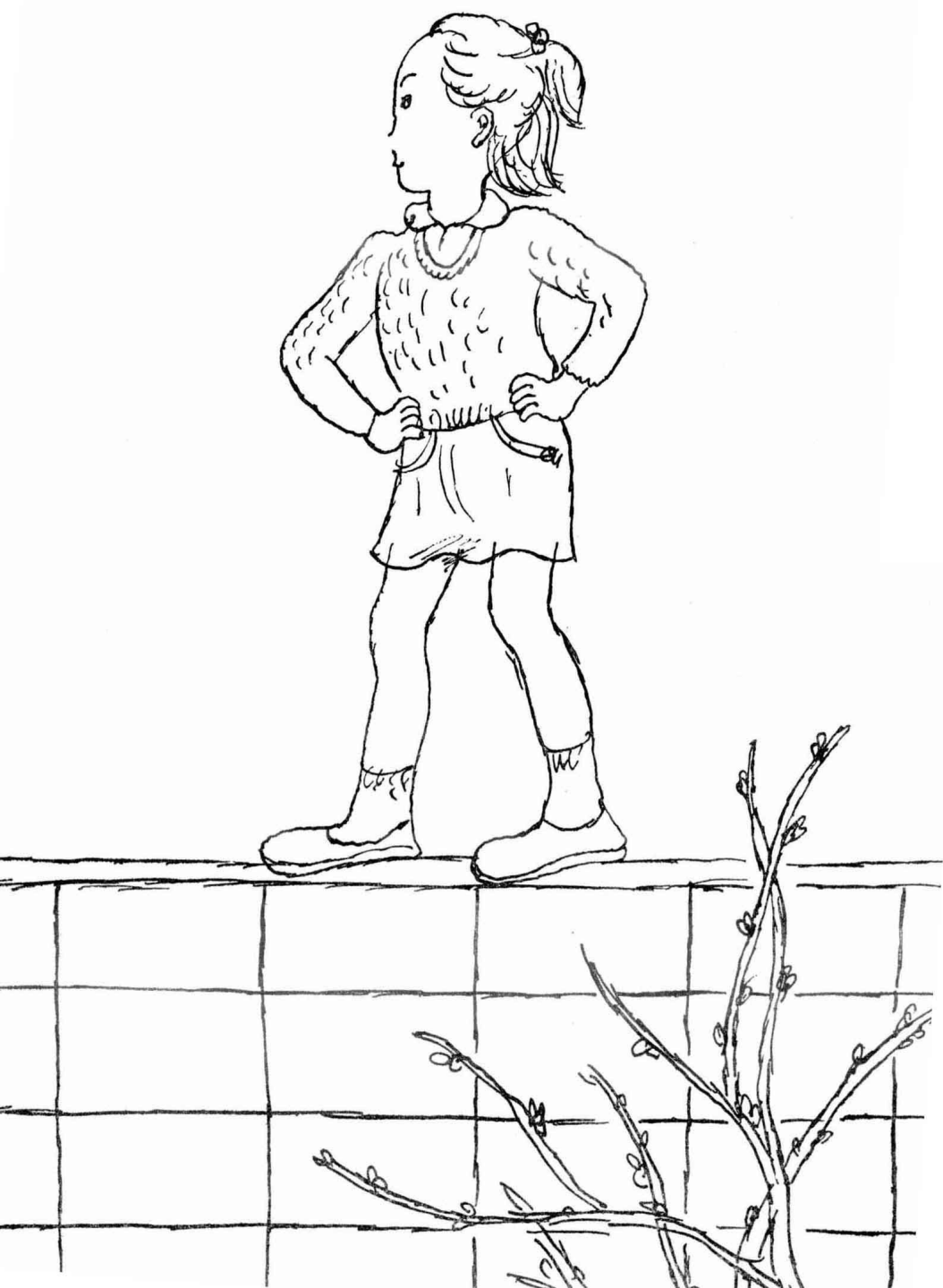
（女の子らしいのにも、いろいろあるけど、ね。）

えい、やつ、ひらりと、ブロックべいにとびのった子——。

名まえは、あきらです。

としは九さいと二か月。

四年生の新学期しんがつきから、この町の小学校へ転入てんにゅうします。



そして、あきららにおこられないよう、これもいっておかなくては。

あまらは、ちゃーんと、女の子らしい女の子です。



そうですとも。

とんできたボールを、バーンとけとばしたからって、あきらが「男ん子のごたる」とはかぎりません。

ボールが落^おちるはずだった、その草むらをみてください。草の中で、うすむらさきにゆれる、シャガの花をみてください。

ボールをけとばさなくても、このかわいい野の花は、折^おれずにさいていたでしうか。

あ、そうでした。

あきらがやってきたところは、泉^{いずみ}が丘神社^{おかじんじや}の境内^{けいだい}です。

ブロックべいにまたがって、ぼんやり雲をみあげていたら、

「泉が丘神社へいけば、友だちのおるとよ。」

と、おとなりのお婆さんが、おしえてくれたのです。

神社は名まえどおり、泉が丘、という丘の上にありました。

丘の上にあるのは、神社と、灌漑用の大池と、池のむこう岸をかこむ杉林——杉林は、すこしずつ高くなっていき、後ろの山につづくのです。

泉が丘神社の広い境内は、町の子どもたちの、遊び場でもありました。

ところが、まずあきらをでむかえたのが、花をつぶしそうなボールだったのです。

あきらのかとばしたボールは、

「ひゃあー、すっごいキック！」

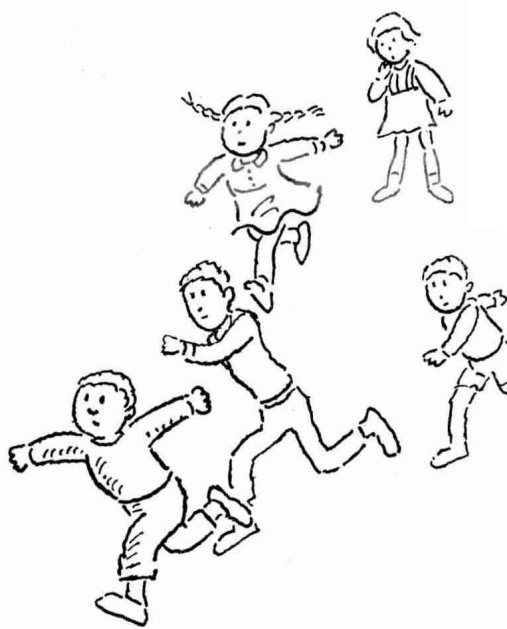
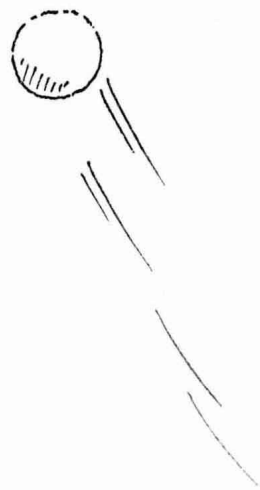
ボールを追ってきた男の子が、おこるのもわすれたほど、高く、遠くへとびました。

ただし、その子たちがドッジボールをしてる場所とは、反対の方向へ。

「おまえ、まるで——」

男の子は、べつの子がボールを追って走るのを、みとどけてからいいました。

「男ん子のごたる。」



「わあい、いったいった。やっぱりいったわ。」

よろこぶことでもないのに、あきらめたら、ほっとしたように、手をたたくんです。

「けえ、へんなやつ。」

男の子はあらためて、このみねない女の子を観察かんさつします。

と、あきらめはきゆうに、顔からニコニコをひっこめました。

「ヤツなんかじゃないからっ。オマエでもないからっ。あんたの目下めしただなんて、きまっ
てないからあ！」

「そ、そんな、キイキイおこることないじゃないか。名まえ、知らないもん。」

「あ、そうか。あたしあきらよ。そりや名まえだけは、男の子にもあると思うけど……
でも、キイキイだなんて、失礼しうれいですからね。キイキイっていうのは——」

あきらはず、じぶんの耳をおさえました。

そしてまあ、キイーっと、はりさけるような声をあげたのです。

「よせよ、やめろって。ぼくは、てった——鉄太てった。てったあ！」

首をちぢこめた、いかつい肩かたの男の子。鉄太てつたくんというその子まで、じぶんの名を、さけぶことになりました。

きみような自己紹介じこしょうかいだったけれど、鉄太くんは「ドッジボール、はいるか」と、さそってくれたのです。

あきらはもちろん、はいることにきめました。だって友だちをつくるために、この丘おかへきたんですもの。



あきらの仲間なかま入りをきらったのは、さっき、けとばされたボールを、遠くまでひろいにいった洋子ようこちゃん。でも鉄太くんのおかげで、なんとか、入れてもらえたけど。鉄太くんは、広い胸むねで、ぼっし、ぼっしとボールをとめます。ふとい腕うでで、ぼっか、ぼっかと敵てきをアウトにします。

味方みかたとしては、たのもしいかぎりだし、第一だいいちあきらを、仲間に入れてくれた恩人おんじんです。なのに？